

歴史の中の女たち〈第 18 回〉

解放奴隷シカ・ダ・シルヴァ

伊藤滋子

1735 年頃、金やダイヤモンドのブームに沸くミナスジェライス（ブラジル）の奴隷小屋で一人の女兒が生まれた。母親は黒人奴隷で、父親はその主人のポルトガル人であったから、フランシスカと名付けられたその赤ん坊はムラタあるいはパルダと呼ばれた混血児である。奴隷の幼児死亡率が 40% にも達するなかを生き延びたフランシスカは 6、7 才の頃にはもう大人に混じって働いていたが、いつの頃かテジュコ村に住むポルトガル人外科医ピーレスに売られていた。独身の彼は数人の女奴隷を侍らせて暮らしている。彼女たちは裸足で派手な色の服を着て市場へ買い物に行ったり、川へ洗濯に、あるいは水道場へ水を汲みに行き、日曜日には教会に行く主人に付き従ったりと、村の中を自由に動き回り、鎖に繋がれていたわけではない。ピーレスは女たちのほかにも家族持ちの奴隷数人を持ち、金やダイヤの採掘に従事させたり、農園で働かせたりしていて、それがテジュコに住むポルトガル人の一般的な生業であった。

思春期をピーレスの家で過ごしたフランシスカは彼との間に最初の子供シモンを生む。当時の常として奴隷の子供の洗礼記録に父親の名前はないが、ピーレスは死ぬ 5 年前の 60 才ぐらいのとき遺書を作成し、4 才のシモンをはじめそれぞれ別の奴隷に生ませた 3 人の息子に遺産を相続させている。彼らは出生と同時に解放され自由人

となっていたが、その母親たちは奴隷のままだ。フランシスカは彼が遺言状を作成する 2 年前に別のポルトガル人に売られていた。その経緯は不明だが、丁度その頃テジュコに司教派遣の巡察師が来訪し、複数の妾と同居していることで叱責を受けたピーレスは彼女を手放さざるを得なくなったらしい。彼は地方議会の議長や裁判官なども務めており、要職にある人物にあるまじき生活を送っていると非難されたものか。金やダイヤが発見されて急激に人口が増えたこの地域では男女の比率が極端にアンバランスである。テジュコが属するセロ・フリオ地区における 1738 年の調査では全人口 9681 人中 84%、奴隷に限れば 97% が男性である。当然非婚が増え、それは風紀の乱れにつながり、教会の悩みの種となっていた。司教はたびたび巡察師を派遣して人々の罪を聴聞したが、それに乗じて敵を讒訴するようなケースもあり、ピーレスもその標的にされた可能性はある。

ミナスジェライスでダイヤが発見されたのは公式には 1729 年とされるが、それは王室に報告された日付で、実際にはそれ以前から発掘されていたらしく、10 年間そこに赴任していたゴベルナドール（執政官）は巨万の富を得て帰国している。ダイヤは 1729 年以降も 5 分の 1 税を納めれば誰でも採掘でき、ついで奴隷一人ごとに課税される制度に変わる。ダイヤも金と同じ

ように川床や川岸でみつきり、乾季は採取が容易だが、枯渇してくると鉱床を掘り起こして洗鉱する、ラヴラという大掛かりな方法がとられるようになった。それはかなり危険な作業で、溺れたり、怪我をする者が多発し、ピーレスのような外科医が必要とされたわけである。新しい技術によって生産が増えすぎると価格が下落したり、また徴税の方法が恣意的だったりする弊害を是正するために、王室は 1740 年から「ダイヤモンド鉱区」を限定して人の出入りを規制し、一定のダイヤを納めることを条件に採掘権を有力な民間人に譲渡する請負人制度を発足させた。そしてゴベルナドールが希望者を募ったところ、「ダイヤモンド鉱区」の中心であったテジュコの人々は 1000 人の奴隷を使って 10 年契約で鉱区内のダイヤを発掘するという案を示したが、ゴベルナドールはそれを拒絶し、600 人の奴隷を使って 4 年間契約という、王室にとってより有利な条件を提示したジョアン・フェルナンデス・デ・オリベイラとその仲間の案を採用し、以降それが請負の基本条件となる。

だがそれは請負人にとっては非常に厳しい条件であった。まず、開発できる地域が限定されていた上に、簡単に採掘できる場所はすでに掘り尽くされ、開発が困難な場所は大掛かりな工事が必要となり、600 人の奴隷ではとても間に合わない。それに加えて、ダイヤは年に一度まとめてポルトガルに送られて売られたから、実際に利益を手にするまでに時間がかかり、それまでの経費は手形を組んで賄わねばならない。若くしてブラジルに渡ってきて、ミナスジェライスでさまざまな仕事に取り組んで事業を拡げてきた父ジョアン（同名の息子と区別

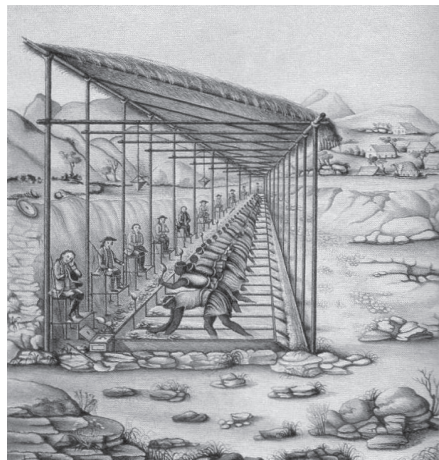


するためこう呼ぶことにする) はそれでも歯を食いしばって苦境に耐え、1771 年に請負人制度が廃止されるまで行われた計 6 期の契約のうち、第 3 期を除く全期間の請負の中心となった(最後の第 6 期は息子が契約)。第 3 期の契約が更新される時期、彼は妻を亡くし経済的にも追い込まれており、契約を落札することができなかった。彼に代わり、1748 年から始まる第 3 期の契約を請負った人物は利潤を上げるために違反行為を行い、本国に送還されて投獄された。そしてその後、裕福な未亡人と再婚し、その持参金で手形を決済することができた父ジョアンが請負人に復帰し、それ以降ようやく事業が軌道に乗るようになった。彼はイギリスやオランダの金融業者からまで借金をしていることでもわかるようにこの仕事は大きな負債を伴う一方で、上がる利潤も大きい。

この頃ポルトガル本国では国王が崩御してジョゼ一世が即位し、それに伴い国政において絶対権力を誇るようになるポンバル侯爵が登場する。彼は国益を重視する重商主義をとり、すべてを国家の管理下に置こうとした。この時までテジュコに住んでい

た父ジョアンはこれまでの売上金を清算すると同時に、宮廷との結びつきを強める必要性を感じ、1751 年新妻とともに本国に帰る。そしてポンバル侯と友好を結ぶことに成功し、以来彼の事業は順風満帆となった。テジュコには自分の代理に一人息子のジョアンを派遣した。彼はミナスジェライスで生まれ、13 才で本国に送られてイエズス会の神学校で学び、コインブラ大学で学士号を取ったという超エリートである。

ジョアンは 1753 年、26 才でテジュコに入る。そして、前述の外科医ピーレスがフランシスカを 80 万レアルで売り渡した相手というのが、このジョアンであった。彼は父がそうしたように、30 才ぐらいまでは独身で過ごし、条件の良い結婚ができるのを待つつも、その間情熱のはけ口として女奴隷を買ったのだった。しかしどうしたとか、彼はフランシスカを手に入れた数カ月後には彼女を解放し、妻のように扱い始めた。18 世紀中に「ダイヤモンド鉱区」で 23 人の奴隷が解放されているが、大概は主人の死後、遺言によって解放されるか、稀には奴隷自身が貯めたお金を主人に払って自由を買い取っている。わざわざ買った奴隷をすぐに解放したケースは他にない。彼女はシルヴァという苗字を与えられ、シカ・ダ・シルヴァ即ちシルヴァの娘、と呼ばれるようになる。通常、奴隷に苗字はなく、アフリカから連れてこられたものは名前の後に出身地名、ブラジル生まれの者は両親が黒人の場合はクリオウロ、混血の場合はムラトまたはパルド、インディオと黒人の混血はカブラを苗字の代わりに付けて識別された。18 世紀後半からは主人の苗字をもらうことが一般的となる。



シカはその後、ジョアンが本国に去るまでの 15 年間に彼とともに暮らし、4 男 9 女の 13 人の子供を生んだ。一人も欠けずに成人したのも奇跡に近い。ただし、階級社会を維持するために結婚に関しては厳しい制限があり、白人と解放奴隷の結婚は禁止されていた。代わりにジョアンは彼女に正妻と同等の地位を与えようとした。すなわちシカに自由人として生きるための財産を持たせ、子供たちにはオリベイラという苗字を継がせて嫡子としたのである。シカの生活は完全に白人のセニョーラのそれ、いやそれ以上となった。何しろジョアンはこの地方で最も裕福で名誉ある「ダイヤモンド掘請負人」だったのだから。子供が生まれると、上流社会の習慣に従って自分で授乳せず、乳母となる奴隷を買い求めた。後には 100 人近い奴隷を所有し、白人と同じように奴隷をダイヤモンドの採掘や農園に貸し出して稼いだ。奴隷であったシカは奴隷を持つ身分へと変身を遂げたのだが、白人が持つ価値観に自身を同化させた彼女には、そのことに何の逡巡も感じてはいない。そして元奴隷であっても、一旦解放されれば自由人として受け入れられ、さまざまな職業について富を築き、社会的上昇を遂げるケ

ースが数多くみられるのは「ダイヤモンド鉱区」ならでのことであった。1774年の調査ではこの地区の511人の戸主のうち286人が混血または黒人で、282人が男性、229人が女性である。女性のうち197人が黒人、または混血で、その中に正式に結婚している者はひとりもない。

ジョアンがシカの持ち家として建てた家は広くて立派で、のちに娘たちが結婚式を挙げる礼拝堂まで備えていた。村の人々の暮らしは豊かでオペラハウスもあり、商店にはロバで運ばれてきたイギリス製の陶器やインドの品物などが満ちあふれ、教会には後世にまで名を残す混血の専属の作曲家や120人の楽士がいた。ミナスジェライスの村々の風景がどこことなくわれわれにとって懐かしさを感じさせるのは、アジアの影響を受けた建物のせいだろう。日本にまで及ぶ商業圏を築いたポルトガル商人の活動の場の広さを思わせる。教育水準も高く当時ヨーロッパで読まれた本が大量に持ち込まれ、コインブラ大学に多くの留学生を送っていた。（スペインと違い、ポルトガルは植民地に大学を建てなかった。）シカとジョアンの4人の息子およびシカとピーレスとの息子シモンも、ある程度の年齢に達すると、次々にポルトガルのジョアンのもとに送られて教育を受けた。というのは1770年ポルトガルにいた父が急死し、ジョアンは急遽本国へ帰って行ったからだ。それがシカとの最後の別れとなった。

テジュコに残されたシカはその後ジョアンがいたときと全く同じように暮らし、9人の娘たちはすべて、ジョアンのいた頃から女子修道院で教育を受けていた。通常、上流階級の娘たちは成人するまで修道院で過ごし、良い縁談がまとまるとそこを出る

か、あるいはそのまま修道女になった。ジョアンの妹5人も全員本国で修道女となっている。ミナスジェライスは教団（フランシスコ会、ドミニコ会、イエズス会など）の活動が禁止されていたため、修道院も教会もすべて司教直属の在俗教会である。村の中の生活は教会が中心であり、教会も白人の教会、混血の教会、黒人の教会と人種別に分かれていて、それはまるで階級社会の縮図であった。そして各教会の中の信徒団が教会の建設や改修をはじめ、祭り、洗礼、結婚、終油、埋葬など市民生活に直接かかわるすべての行事をとり仕切り、同時にそこは社交の場ともなっていた。シカは最上層の白人の信徒団に所属していたが、それだけでなく混血の信徒団や黒人の信徒団にも属し、それぞれの活動にかかわっていた。財力がなければできないことであったが、彼女はその活動を通じて積極的に地方社会の中で自分の地位を確立したのであった。テジュコでは、解放されて社会的上昇を遂げた元奴隷やその子孫が白人の信徒団に所属する例が結構あり、これは同じミナスジェライスの中でも他の村では見られない現象である。

有色人種であっても条件さえ整えば白人の文化に同化してその社会に入りこみ、奴隷であったことを忘れさせたシカのケースから、その後様々な伝説が生まれた。しかしそれが奴隷制度という過酷な現実から眼をそらせるのに利用されたという側面があったことも忘れてはならない。請負人制度はジョアンの本国への帰国を機に廃止され、新たに「王室ダイヤモンド採掘監督局」が設立されて、国家が直接採掘を管理することになり、それは独立まで続いた。

（いとう・しげこ）